

4.8 キリスト教と文化研究センター

4.8.1 理念・目的

＜2003年度に設定した目標＞

キリスト教と文化研究センター（Research Center for Christianity and Culture）は、本学のキリスト教主義に基づいた研究と教育の充実をめざして、1997年度に発足した。センターの名称を「キリスト教と文化」としたのは、本センターが、現代社会と文化が直面する諸問題とキリスト教とのダイナミックな折衝を、学術的に探究するという設立理念によっている。

この理念目的に沿った具体的な目標は次のとおりである。

1. キリスト教主義に基づいた教育の内実化
2. キリスト教と文化一般の総合分析と研究
3. 現代社会が直面するグローバル世界の諸問題の探求
4. 一般地域社会への啓発・教育の貢献
5. 日本におけるキリスト教平和学の情報発信センターの構築

（現状の説明）

キリスト教と文化研究センター（以下「RCC」と略す）は、ミッション・スクールとして発足した本学のキリスト教主義に基づいた教育と研究の充実を目的とした学術研究機関として、1997年に設立された。とくにセンターの名称に「キリスト教」と「文化」の二つのキーワードを掲げたのは、世界宗教であるキリスト教と現代文化一般の諸課題を、学際的対話のもとに総合的に研究し、その成果を学内外に公開していくことを目的としたことによる。

この設立理念にしたがって、以下に要約される各種の具体的な活動を行ってきた。

- ・日本の国内外の指導的研究者を招いての公開フォーラムの開催
- ・RCC研究員によって組織された定期的研究会の開催
- ・研究成果の出版と定期刊行物の発行
- ・地域社会に開かれたキリスト教講座の実施
- ・大学教育におけるキリスト教関連講座の開設と運営

RCCは2005年度で発足から9年目を迎えた比較的新しい学術研究機関である。しかしその間、設立の理念を踏まえて、着実に経験と実績を積み重ね、とくにこの数年においては充実度が著しい。これは評議員会、センター長室会をはじめ、運営・企画を検討する定期的委員会の円滑化、各種の研究会、広報活動の整備・運営が軌道に乗ったためである。今後は現状の活動内容のレベルを落とすことなく、定期的に設定される研究テーマに沿って、さらに充実・拡充していくことをめざす。以下、掲げた目標ごとに現状をみていく。

1. キリスト教主義に基づいた教育の内実化

2003年度においては、前年に立ち上げられた研究プロジェクト「暴力とキリスト教」（代表・前島宗甫センター副長）が、大学共同研究に採択され、その研究成果を2004年

度の大学総合コースの開講へとつなげた。

またRCCが提供する複数分野専攻制（MDS）プログラムは、キリスト教のより深い知識の習得をめざす科目群を中核として、体系的なカリキュラムを形成し11科目の提供を行なった。

なお2004年度から神学部がコース制を導入し、複数分野専攻制（MDS）を設置したことに伴い、2003年度をもってRCCとしてのMDS科目の提供を終えることになった。そのため、関連規程（「キリスト教と文化研究センター規程」「大学学則」「事務分掌規程別表」）の一部改正を行なった。

2. キリスト教と文化一般の総合分析と研究

2003年度は、研究員のための研究会を2回、RCCフォーラムを5回、二種のプロジェクト研究会を合計で10回開催した。2000年度から3年間にわたる総合研究主題「民族と宗教」の講演内容をまとめ、『民と神と神々と－イスラーム・アメリカ・日本を読む』（関西学院大学出版会）として出版して研究活動成果を公表した。また研究紀要『キリスト教と文化研究』第5号（通巻第7号、2004年3月）を刊行した。

2004年度においては、研究プロジェクトのひとつ「スピリチュアリティと宗教」（代表・窪寺俊之神学部教授）が初期の目標を完了し、その成果をブックレット『スピリチュアル・ケアを語る』（関西学院大学出版会、2004年8月）として刊行した。また研究員のための研究会を1回、RCCフォーラムを5回、公開講演会を1回開催した。研究紀要『キリスト教と文化研究』第6号（通巻第8号、2005年3月）を発刊した。

3. 現代社会が直面するグローバル世界の諸問題の探求

2003年度に第3次総合研究主題を「エスニシティ・宗教・グローバリズムを問う」と設定し、現代のグローバル化した世界を集中的に探究することとして多角的な研究活動を行なった。その成果は『アメリカの戦争と宗教――アジアのまなざしから』（新教出版社、2004年9月）として公表した。また現代世界の構造的暴力の現実、聖書的な解明、平和的解決への提言を究明した、2002～2003年度の研究プロジェクト「暴力とキリスト教」の成果を、『暴力を考える－キリスト教の視点から』（関西学院大学出版会、2005年3月）として、学内のキリスト教主義教育に資する同時に、広く学会、教育界に発信するものとして、2004年度に出版を行なった。

4. 一般地域社会への啓発・教育の貢献

2003年度において、大学在学生の家族およびその関係者を対象とした「父母のためのキリスト教講座」を延べ10回開催した。2004年度も引き続き同講座を継続し、特別講座を含めて前年と同じく10回行なった。また上記2のフォーラムや研究会活動も公開し、学外からも多くの聴衆を集めた。

5. 日本におけるキリスト教平和学の情報発信センターの構築

これは2005年度からの目標課題であるが、すでに情報発信機能の下地として、2003年度から、広報室の協力を得てホームページを刷新した。また2003年度には、RCCフォーラムの講演や各種活動を掲載した「RCCニューズレター」を創刊し、学内外への情報発信のベースとした。同ニューズレターは2003年度に3回、2004年度も3回と定期的に刊行している。

2003年度より、大学のキリスト教教育ならびに学術研究の向上をめざすTRC（神学部、RCC、大学宗教主事、および宗教センターのメンバーによる協議会）において、大学第三次中長期計画、とくに宗教センターの建替えに伴うRCCの研究拠点作りについて実質的な計画を検討した。

（点検・評価の結果）

1. 「キリスト教主義に基づいた教育の内実化」は、大学総合コースを開設したことで、成果が出た。またMDSは2004年度にRCCの管轄を離れたが、それ以前には各種の講座を提供できたので、所期の目標は充足できた。
2. 「キリスト教と文化一般の総合分析と研究」は、研究会、公開フォーラムの開催、本の出版を複数行ない、円滑に進んでいる。
3. 「現代社会が直面するグローバル世界の諸問題の探求」も成果を出して、順調に進んでいる。
4. 「一般地域社会への啓発・教育の貢献」については、学外に向けたキリスト教講座を定期的実施でき、一定人数の受講者が定着してきたこともあり、一応の成果があった。
5. 「日本におけるキリスト教平和学の情報発信センターの構築」は、成果を積み重ねつつあると評価しえる。

（改善の具体的方策）

2005年度は、前年度の研究主題（「エスニシティ・宗教・グローバリズムを問う」）を発展的に引き継ぐかたちで「キリスト教と平和戦略研究」のテーマを設定し、これをもって文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業へ申請した。その結果、残念ながら不採択となったものの、基本的構想は高く評価され、また学内においてもこの方向での研究が推進されることに期待感がある。今後はこれをどう研究・教育活動に反映していくかが課題になる。

全体としてRCCの教育研究活動は順調に進んでいるとの自己点検・評価が出来、今後の努力目標はこれを継続的に維持していくことだが、いくつかの改善点と努力目標を提示する。

1. 総合コースで現在提供している講座に加えて、もう一つ増設することを目標にする。
2. 研究会プロジェクトの参加に限られた傾向にあるので、広報活動を活発化して参加者を拡充する。
3. グローバル的視点を得るために、海外の研究者の招聘、交流を積極的に計る。
4. 地域社会への情報発信、ニュースの提供をより効果的なものにする。
5. 平和学構築の研究に財政的基盤を確立する。

4.8.2 教員組織（運営体制）

<2003年度に設定した目標>

1. 「委託研究員制度」（研究主題および期間を限定）を導入する。
2. 複数の研究プロジェクトを設定する。
3. 研究プロジェクトへ学外研究者の参加を計る。
4. 活動の迅速な報告のため、<ニューズレター>を発行する。
5. 研究成果をタイムリー且つスピーディに公刊する。
6. 宗教センター改築に伴い、共同研究室を設ける。
7. 公募研究費獲得の可能性を探る。

（現状の説明）

RCCは、センター長、センター副長2名、主任研究員4名と研究員若干名で構成されている。規程上、センター副長のみが専任教員であり、他は兼任教員である。評議員会（センター長、センター副長の他、主任研究員・神学部教授会・学部宗教主事・キリスト教主義教育委員会から代表各1名、大学教務副部長、学長が任命した教員の計9名で構成）は、管理・運営における基本的方針について責任を負い、日常の企画・活動は毎月開催するセンター長室会（センター長、センター副長、主任研究員の計7名）で運営している。これらのメンバーで、設立理念の実現に向けて研究・教育活動を展開し、2004年度後期からは、総合研究テーマに「キリスト教と平和戦略研究」を掲げ、5年間の研究期間を定めた。そして、2005年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業に申請すべく研究員を再編し、学外から研究者3名の招聘を予定し文科省へ申請した。申請は残念ながら不採択となり、計画は縮小せざるを得ない結果となったが、研究テーマ（平和の問題）は継承して、2005年度を開始した。

現在、宗教センターを改築中（竣工後は吉岡記念館と呼称し、神学部、宗教センター、人権教育研究室およびRCCが入居する）であるが、建築ワーキンググループで建物の理念、設計の議論を重ね、「出会いの場」というコンセプトの下、学生・教職員、一般人が出入り可能なラウンジや共同研究室を設置することにした。

（点検・評価の結果）

1. 「委託研究員制度の導入」は進んでおらず、今後、検討の余地を残している。
2. 「複数の研究プロジェクトの設置」は、2005年度から①「キリスト教と平和構築」（代表・神田健次センター副長）、②「聖餐の理論と実践」（代表・打樋啓史社会学部助教授）、③「聖典と今日の課題」（代表・樋口進センター副長）を立ち上げるなど（2003年に発足した「スピリチュアリティと宗教」と併せて4プロジェクト）円滑に進んでいる。
3. 「学外研究者の参加」は、2005年度RCC客員研究員として青山学院大学から大庭昭博教授を招聘することになっており、進んでいる。
4. 「ニューズレターの発行」は、2003年度3回、2004年度3回刊行と順調に成果が現れている。

5. 「研究成果の公刊」は、2004年度は研究紀要の他3冊公刊することが出来、順調に成果を上げている。
6. 「共同研究室の設置」は、順調に進んでいる。
7. 「公募研究費の獲得」は、現在のところ遅れている。

(改善の具体的方策)

センター副長（1名）が専任教員である以外は兼任教員である点に運営・体制上の問題点を含有するものの、1997年の創立以来、意欲的に研究・教育にエネルギーを傾注している。

2006年4月に吉岡記念館が完成するのに伴いRCC共同研究室が設けられること、および2007年にはRCC創設10周年を迎えることを契機に、目標の1「委託研究員」について規程を整備する。目標の7「公募研究費」については、2006年度以降も引き続き科学研究費補助金（文部科学省）や外部財団へ申請し研究費の獲得を計る。